



自然・ひと・体験

編集：日本野外教育学会広報委員会

発行：日本野外教育学会事務局

〒305-8574 つくば市天王台 1-1-1 筑波大学体育系野外運動研究室内

TEL&FAX. 029-853-6339 MAIL. office@joes.gr.jp



第 28 回大会開会式

日本野外教育学会 第 28 回大会 報告

巻頭言「これからどうなる青少年教育施設～大転換期を迎える国立施設の行方～」

青木 康太郎 2

日本野外教育学会 第 28 回大会 報告

3～10

若手コラム

11

海外研修報告

12

第 8 回 日本野外教育学会研究集会 開催のご案内

13

書籍紹介

14

事務局便り

15～16

巻頭言

これからどうなる青少年教育施設～大転換期を迎える国立施設の行方～

青木 康太郎（國學院大學）

近年、施設の老朽化や少子化に伴う利用者数の減少などにより、公立施設では統廃合や指定管理者制度・PFI の導入が進み、青少年教育施設の在り方も変化の時を迎えています。本学会でも令和 4 年 7 月に策定した政策提言の中で、「今の時代に相応しい青少年教育施設の在り方の検討」について提案をしました。

私自身、かつて国立施設の職員であったこともあり、最近の青少年教育施設をめぐる動向には強い関心をもっています。第 27・28 回大会では、「青少年教育施設のこれからの役割を考える」をテーマに自主企画シンポジウムを開催し、施設が抱える課題やこれからの社会で期待される役割などについて議論を深めました。ご参加いただいた皆様には改めて感謝申し上げます。そこで本稿では、その延長線として「これからどうなる青少年教育施設」と題し、先日、文部科学省が公表した報告書をもとに、今後の国立施設の行方について考えてみたいと思います。

令和 7 年 8 月、文部科学省は「国立青少年教育施設の振興方策について（報告書）」を公表しました。これは、令和 8 年度から始まる国立青少年教育振興機構の第 5 期中期目標期間を見据え、今後の国立施設の振興方策について取りまとめたものになります。報告書では、今後の国立施設の在り方として、①拠点施設の特定、②機能別分化の検討、③目標管理体制の徹底の 3 つの柱が示されました。詳細は報告書に譲りますが、拠点施設の設定と機能別分化の検討については速やかに着手し、結論が出た施設から、順次、機能強化や縮小・再編の取組を推進していくとしています。つまり、全 28 施設の立地特性や教育機能を踏まえ、一定のエリアごとにナショナルセンターとして拠点機能を担う施設を定め、戦略的に施設の統廃合や規模等の見直しを行いながら、組織再編と機能別分化に取り組んでいくことになるわけです。

国立施設は、昭和 34 年の国立中央青年の家の設置から平成 3 年の国立妙高少年自然の家の開設まで、33 年にわたり整備が進められてきました。その後、平成 13 年の独立行政法人化、平成 18 年の国立青少年教育振興機構の発足という節目はありましたが、35 年間、28 施設体制を維持しながら運営を続けてきました。それがこの報告書を

契機に大きく形を変えることになるわけです。国立施設は今まさに大きな転換期を迎えようとしているといえるのです。

しかし、施設数や規模等を見直し、組織を再編するだけで今般の課題が解決するわけではありません。多くの人に訪れてもらえる魅力的な施設へと変貌するには、付加価値の高い教育研修プログラムの開発、新たな利用者層の開拓、マーケティング手法の導入、適正な利用料金の設定、民間活力の導入など、総合的な改革が必要となります。報告書では、「利用者のニーズを重視したサービスを提供する『マーケットイン』の考え方の導入」「利便性、快適性、安全性の観点からの利用者サービスの充実や利用者に対するホスピタリティの向上」「地域特有の素材（自然、歴史、文化、産業、物語等）を生かした教育研修プログラムの開発」「教員の負担軽減に向けた直接指導の充実」「施設利用を前提としないアウトリーチ型の取組の実施」「大人向け、シニア向け、ファミリーや外国人向けといった新たな利用者層の開拓に向けた取組の検討」「デジタルマーケティングを取り入れた広報施策の改善や充実」など、多様な視点から改革の方向性が示されています。

最近の公立施設をみると、栃木 JIMINIE 倶楽部自然の家みかも、熊本市立金峰山自然の家ヤマガラビレッジ、横浜市上郷・森の家のように、施設の新築や大規模改修に伴って PFI を導入し、レジャー要素を取り入れた新たな施設運営に挑戦する事例も増えています。こうした流れを受け、国立施設においても、教育研修プログラム（ソフト）の魅力化のみならず、多様な利用者や DX にも対応した施設（ハード）への刷新、公立施設等との更なる連携強化を進めることで、令和の時代にふさわしい青少年教育施設へと進化することが期待されています。報告書の作成に携わった一人として、今後の国立施設の取り組みを応援しつつ、その行方を見守っていきたいと思います。

国立青少年教育施設の振興方策について（報告書）

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/049/attach/mext_00005.html

日本野外教育学会 第 28 回大会 報告

◆ 日本野外教育学会第 28 回大会 実行委員会挨拶

日本野外教育学会第 28 回大会を終えて

実行委員長 中野 友博（びわこ成蹊スポーツ大学）
事務局長 蓬田 高正（天理大学）

6 月 28 日（土）～29 日（日）の日程で、天理大学体育学部キャンパスにおいて日本野外教育学会第 28 回大会を開催いたしました。大会当日は 168 名のご参加をいただき、無事に終えることができました。

2004 年の奈良教育大学での第 7 回大会以来、21 年ぶりの奈良での大会は、関西地区の大学の先生方を中心に「オール関西」で実行委員会を組織しました。大会テーマを設定するにあたり、近年のグリーンツーリズム・エコツーリズム・ウエルネスツーリズムのように自然を活用した新たなツーリズムの形態に着目しました。スポーツ庁では、訪日外国人の増加やスポーツによる地域・経済の活性化を目指してスポーツツーリズムを推進しており、その中でも日本の四季の魅力に恵まれた自然環境を活かしたアウトドアスポーツに注目しています。2022 年に発表された「スポーツ基本計画」においても、各地域の自然資源を活用した「アウトドアスポーツツーリズム」を積極的に推進することが明記されています。また、観光庁においても 2020 年に閣議決定された「観光立国推進基本計画」で各地域の自然環境・歴史文化等の資源を活用したツーリズムの推進が謳われています。このような機運が高まっていることから、今大会では、子供から大人までが楽しめる自然環境を活かしたツーリズムを通して、子供から大人の学びや地域活性化に向けて、今後の野外教育がどうあるべきかを考えるきっかけにしたいという思いから、「ツーリズムから考える自然体験の価値」というテーマを設定させていただきました。基調講演では自然環境といった様々な地域資源の活用を考える場として、一般社団法人 ONSEN・ガストロノミーツーリズム推進機構理事長の小川正人氏をお招きして「野外教育と地域資源：ツーリズムを通じた新たな学びの創出」というタイトルでご講演いただきました。また、シンポジウムでは野外教育が地域にもたらす可能性とその未来について議論する場として「地域資源の可能性を広げる野外

教育の役割」というタイトルで、基調講演に引き続き小川正人氏、島田知明氏（然別湖ネイチャーセンターガイド）、西村典芳氏（流通科学大学教授）にご登壇いただき、地域資源の価値を高める重要な手段としての野外教育についてフロアの皆様とともに考えることができました。

この他にも、自主企画シンポジウム 6 件、研究発表（口頭）14 件、研究発表（ポスター）21 件、実践報告 18 件の発表があり、多角的な視点から野外教育の意義や方法・効果などについて議論を深めることができました。また、情報交換会では 102 名の方にご参加いただき、奈良の地酒を堪能しながら懇親を深めていただき有意義な時間となりました。

最後に、今大会にご参加いただいた皆様や講演・シンポジウムを快く引き受けてくださいました講師の皆様、協賛および後援をいただいた法人・団体、大会運営をサポートしてくれた学生スタッフの諸君、多くの方々のご協力により有意義な大会となりました。実行委員を代表しまして、心より感謝申し上げます。



第 28 回大会会場：天理大学

◆ 基調講演

「野外教育と地域資源：ツーリズムを通じた新たな学びの創出」

小川 正人 氏 一般社団法人 ONSEN・ガストロノミーツーリズム推進機構理事長
一般社団法人ネイチャーホスピタリティ協会理事長

日本野外教育学会第28回大会の基調講演は、温泉と食をウォーキングで繋ぎながら、その地域の景観や自然を体感する「ONSEN・ガストロノミーツーリズム」を実践されている小川正人氏をお招きし、「野外教育と地域資源：ツーリズムを通じた新たな学びの創出」というタイトルで実施しました。小川先生は前任の ANA 総合研究所の時に地域活性を担当する部署におり、その時にガストロノミーツーリズムに出会い、それに温泉地を組み合わせた「ONSEN・ガストロノミーツーリズム」を始められたという経歴をお持ちです。ONSEN・ガストロノミーツーリズムを立ち上げた経緯から、現代社会の問題点、それに対する自然体験の意義など、会場からの質問にもお答えいただきながら幅広いテーマで講演していただきました。

まず観光業界の現状としては、世の中のデジタル化が進んだ反面、人々は「心と体のリトリートメント」を求めるようになり、日常生活から離れて「地域に触れる」「自然に浸る」事が重要になってきたこと、その代表的な取組が、ガストロノミーツーリズムであることをご紹介いただきました。

一方で、人々が関わることにより守られてきた自然環境が多く残る地域では、人口減少が顕在化しており、インバウンドも含めた都会の人々を地方に誘導していくことは、交流人口を支えていくことになり地域活性に繋がること、交流人口を増やすために有効な解決策のひとつが「ガストロノミーツーリズム」であるとお話いただきました。

「ガストロノミーツーリズム」とは、「その土地の気候風土が生んだ食材・習慣・伝統・歴史などによって育まれた食を楽しみ、その土地の食文化に触れることを目的としたツーリズム」のことを言います。日本では海の幸や山の幸があり、地域ごとに特色を生かすことができ、さらにそのガストロノミーツーリズムに日本の温泉を組み合わせるのが「ONSEN・ガストロノミーツーリズム」となります。その地域にある自然・お酒・料理・歴史・文化・地元の方とのふれあいが重要な要素であり、他地域との差別化、新たな価値観・体験・観光資源の開発、それを紹介す

るのが容易でストーリーとして語りやすい、地域のブランド力が高まり再訪意識をもたらすなどの優位性があるとのお話しでした。

講演の中で、「地域資源を、“点”を“面”で捉え、地域に長期滞在させることが必要である。」というお話しは、地域資源を活かしてどのように野外教育のプログラムを開発していくのかという点で、地域を全体としてどのように捉え、繋げていくのかという視点を再確認する機会となりました。



ONSEN・ガストロノミーウォーキング 案内



ONSEN・ガストロノミーウォーキング ゴール地点

報告者：西村 典芳（流通科学大学）

◆ 実行委員会企画シンポジウム

「地域資源の可能性を広げる野外教育の役割」

シンポジスト 小川 正人 氏（一般社団法人 ONSEN・ガストロノミー・ツーリズム推進機構理事長
一般社団法人ネイチャーホスピタリティ協会理事長）

島田 知明 氏（然別湖ネイチャーセンター インストラクター）

シンポジスト・コーディネーター 西村 典芳 氏（流通科学大学 教授）

地域に根ざす自然・文化・人との出会いを通じて、新たな学びを創出する野外教育。その実践は、観光や体験活動と融合しながら、地域資源の価値を高める重要な手段となっています。本シンポジウムでは、温泉・食・自然体験・教育キャンプなど多様なフィールドで活躍する実践者が集い、野外教育が地域にもたらす可能性と、その未来について語り合います。

まず基調講演に引き続き小川氏からは、地域活性化の為に新しい人材が必要であり、ONSEN・ガストロノミーウォーキングを通じて、地域の自然に興味を持つ人材を増やして行き、イベント実施の際、実行委員会に入ってもらい、議論を通じてイベントを作り上げて行くことで、地域に人材が育っていくとのことでした。それにより、地域の問題意識を持つようになり、地域の一体感が生まれ、その地域を盛り上げていく。そういった地域の自発性を醸成することが大事であることが報告されました。また人材育成の一つとして国立公園検定が紹介されました。国立公園検定といった取組は、国立公園の環境保護や持続可能な利用に取り組んでいる人のほかに、自然に興味を持ち始めたような人たちにもアクセスでき、そのような裾野を広げる取組の必要性も報告されました。

次に島田氏からは然別湖ネイチャーセンターでの取り組みから、北海道十勝地方の農耕地帯を地域資源とした大自然を活用したプログラムを提供していること、一事業業者として自然の中で体験を提供することによって、教育的な目的だけではなく、お客様に素敵な思い出を作っていただくことが主な目的であることが報告されました。

最後に西村氏により、学習塾での研修センター運営、旅行会社での教育旅行の経歴から、カナダのインターナショナルキャンピングへの引率しキャンプの市場価値の規模により自然を活かした教育旅行に取り組むようになった経緯、阪神淡路大震災を契機に教育旅行のプログラムや体験学習に特化していった経緯、指導者の育成の重要性から自然体験活動の指導者養成だけではなく、これからリーダーになるような高校生の育成の取り組みなどが

報告されました。

その後のフロアの参加者も含めたディスカッションでは、各シンポジストに活発な質問が投げかけられました。そこでは、ツーリズムにおいて「体験学習をどのように捉えているのか」「教育の観点はどのような意味を持つのか」といった質問や、「食をキーワードにした場合に地元の食材へのこだわりとコストの問題等があるがどのように「食」を捉えているのか」といった質問、「住民が少ない自然環境が豊かな地域では、どのように人材育成を行っていくべきか」といった質問が投げかけられました。野外教育を通じた知の探索、野外教育が人と地域をつなぐ媒介として機能する役割、そして地域づくり、観光、教育の在り方を考える上で、この野外教育の視点を組み込むことの重要性を再認識する機会となりました。



シンポジウムの様子

報告者：西村 典芳（流通科学大学）

※基調講演・シンポジウムの内容は今後の野外教育研究に掲載される予定ですので、詳細はそちらをご覧ください。

◆ 自主企画シンポジウム

アウトドアセラピーズ ―実践入門 その可能性とまなざし―

共同企画者・コーディネーター：吉松 梓（明治大学） 土方 圭（明治大学）

共同企画者・登壇者：中丸 信吾（日本女子体育大学） 黍原 豊（一般社団法人三陸駒舎）
花田 道子（九州共立大学）

共同企画者：佐藤 冬果（東京家政学院大学） 竹内 靖子（桃山学院大学）

野口 和行（慶應義塾大学）

本シンポジウムは、2025 年 3 月に刊行された翻訳書『アウトドアセラピーズ ―実践入門 その可能性とまなざし―』をもとに企画されました。前半の「アウトドアセラピーズとは？」では、原著者 Harper 氏からの日本の読者へのビデオメッセージを上映し、コーディネーターの吉松より本書の概要と野外教育との接点を説明しました。続いて土方氏からは、セラピーの土台となる土地に根ざした癒やしについて紹介いただきました。後半の「日本における実践の可能性とまなざし」では、中丸氏がウィルダネスセラピーとアドベンチャーセラピー、黍原氏が馬・動物介在療法と園芸療法、花田氏が自然と感覚統合と小児作業療法について、それぞれご自身の実践に照らし合わせながら考察していただきました。

ディスカッションでは、西洋のセラピーや自然観を日本に導入する際の文化的な相違や、日本独自の価値をど

のように言語化していくか（本を出してはどうか）など、フロアの先生方から貴重なコメントをいただきました。今回の翻訳およびシンポジウムを通して、改めて国内の実践の可能性を見つめ直す契機ともなりました。一方で、国内における社会認知度や広がりには、まだこれからの段階だとも実感しています。今後、実践者・研究者がつながり合い、多様なアウトドアセラピーの実践を育むことができればと考えております。ご登壇・ご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。



知床・羅臼町における「ふるさと少年探検隊」40 年の歩みと今後の課題

企画者：石川 国広（東京科学大学） 近藤 剛（鳥取短期大学）

コーディネーター：石川 国広（東京科学大学）

登壇者：涌坂 周一（知床財団） 今泉 亮人（羅臼町保健福祉課）

吉田 盛一（羅臼町社会教育課）

葛西 良浩（羅臼町子ども会連合会）

近藤 剛（鳥取短期大学）

本シンポジウムでは、地域に根ざした長期自然体験活動の継続可能性をテーマに、知床・羅臼町で四十年以上にわたり実施されてきた「ふるさと少年探検隊」の実践事例を取り上げ議論を行いました。行政と地域住民が協働し、世界遺産・知床岬を目指す五泊六日の活動を継続してきたことは、地域主体の野外教育の先駆的事例として高く評価されています。当日は、多くの登壇者をオンラインで結び、遠隔地からの報告や意見交換を交えながら進行了ことで、地域間連携の可能性と多様な立場からの学びを実感する場ともなりました。また、本学会が研究者と実践者の共同体であることを踏まえ、学術と現場をつなぐ

視点から課題を共有し合えた点にも大きな意義がありました。議論では、行政や民間との連携による経済的支援の必要性、大学生スタッフの生活や学修機会を考慮した報酬・紹介制度の整備、さらに活動目的や教育的価値をスタッフ間で共有し、地元協力者を含めた運営体制を強化することの重要性が示されました。今後は、過去の参加者や有資格の自然体験指導者の参画を促し、広域的かつ持続可能なネットワーク形成を図ることが期待されます。少人数での実施ながら、今後の実践と研究の接点を再考する貴重な機会となりました。

さらなる自然体験活動の充実に向けた実践者と研究者のマッチング

企画者・コーディネーター：濱谷 弘志（北海道教育大学岩見沢校）

登壇者：赤尾 操（株式会社ウエストジャパンアウトドアスクール）

福富 優（至学館大学） 徳田 真彦（大阪体育大学）

片山 誠（一般社団法人 72 時間サバイバル教育協会）

現在、企画委員会では実践者と研究者のマッチング制度の構築を進めております。今回のシンポジウムは、マッチングを実現する上での課題やルールづくりを検討するため、実践者と研究者双方からの意見や要望などを明らかにして、今後の作業に反映させることを目的としました。シンポジウム前に民間の自然学校と施設の計 24 団体に事前調査を行った結果、8 割が研究者との調査に興味を示し、内容については「プログラムの効果測定」「参加者または保護者のニーズ調査」が多く挙げられました。一方、不安や心配なこととして、「どのようなことをするのか具体的なことがわからない」「プログラムに影響が出るのではないかなど」が挙げられていました。当日は民間の実践者 2 名と研究者 2 名を招いて、実際の実践事例を紹介してもらい、協働した際の苦労や課題などについて双方の立場から話してもらいました。また、今後マッチングを進めるに当たって、民間実践者より意見をもらいました。その結果、研究者側より、「連携によるメリット」としてオ

リジナリティーのある研究デザインや産官学連携によるモデルの可能性などが挙げられました。「むずかしさ、デメリット」として、両者間での成果の認識のズレ、保護者の同意手続きの難しさ、経費など金銭的負担などが挙げられました。また、研究者は仮説検証や理論構築を目的とし、実践者は事業改善、発展を目的とすることから、研究目的や評価基準については相違が出やすいことが挙げられ、マッチングする上では、相互理解を行うことの重要性が挙げられました。さらに、紹介された実践経験から、協働で作業を進めていくための事前打ち合わせで何をどこまでどのようにするのか、それぞれの責任や作業分担はどうするのか、作業を進める中で起きた問題の際、どう対応するかなど、お互いこまめにコミュニケーションをとることが成功のカギになると紹介がありました。企画委員会では、今回得られた情報を取り入れて、今後のマッチング制度をどのようにすべきか検討し、基盤を創っていきたいと思います。

青少年教育施設のこれからを考える②

情報提供者：青木 康太朗（國學院大學）

秋山 洋（国立曽爾青少年自然の家）

ファシリテーター：大本 晋也（青山学院大学）

企画者・コーディネーター：高瀬 宏樹（国立中央青少年交流の家）

前回大会に引き続き、同じテーマで議論しました。今回はこれからの青少年教育施設の機能はどうあるべきか、これからの社会においてどんな役割を果たすべきか、参加された方々で議論しました。

「必要、だけど存在しているだけでは意味がない」という昨年の問題提起をベースに、「施設の老朽化とともに、人も老朽化していないか？（考え方が凝り固まっていないか）」「青少年教育施設は不要不急か」をテーマに小グループでの協議を中心に行いました。

「国公立でも稼ぐ意識が必要」、「国公立には教育課題を解消するミッションがあるはず」、「職員の研修制度を充実させることが必要」、「施設職員がどうあるべきかを

検討していきたい」、「愛知県では施設名称から青少年を取った。全世代が利用できるような運営にしてもよいのでは」、「できる、やってみる志向でチャレンジしたい」といった意見が出ました。

あらためて、時代に応じた施設、運営、指導者が必要であり、社会課題に応じた柔軟な運営が必要という基本線は変わりません。今回、青少年教育施設職員の在り方を検討したいという声がありましたが、野外教育にとっては大切な課題だと思います。引き続き、これからも議論していきたいと考えています。

日本の野外教育の限界 2：インクルーシブ野外活動の本質－誰が楽しむ活動を目指すのか－

企画者：加藤 彩乃（信州大学）a_katou@shinshu-u.ac.jp

話題提供者：小泉 二郎（慶應義塾大学・長野市教育委員会インクルーシブ教育コーディネーター スーパーバイザー）

三浦 豪太（株式会社 ミウラ・ドルフィンズ） 中岡 亜希（合同会社 SOU）

本企画では、インクルーシブな野外活動が、福祉一色ではなく、教育や観光ビジネスの分野として定着するために必要な視点は何かにについて、議論しました。

【小泉氏】教育委員会のお立場での活動報告を交えながら、学校現場における野外教育の現状と課題をご指摘いただきました。特に、「インクルーシブ教育」の定義の曖昧さと、野外教育インストラクターの専門性の不足により、現在の野外教育が学校ニーズに合っておらず、約10%の児童・生徒が野外活動に参加できない状況があることが説明されました。

【三浦氏】プロスキーヤーや、三浦雄一郎氏のサポートチームとしてのご経歴に加え、現在進行中の北海道でのインクルーシブな山岳リゾート構想についてご紹介いただきました。誰もが年齢や障害の有無に関わらず、家族や友人と一緒に楽しめるよう、インクルーシブな視点から設計された、施設・サービス・プログラムの構想が語られ、観光ビジネスとしての展開可能性についても示唆されました。

【中岡氏】ご自身が車いすユーザーとして実施されてきた、

富士山登頂や、イエローナイフでの-30℃環境での調査活動、世界初となる重度障害者の八甲田山 BC-Ski などといった様々な調査研究や、サポート技術の開発を踏まえ、こうした挑戦的な取り組みの経緯と社会的意義について、本学会・関連分野へ問題提起いただきました。特に、重度な障害のある方に対する野外活動の社会環境上の限界や、それに対応する適切な機材選定・運用が可能な専門家の育成の必要性をご指摘いただきました。

【ディスカッション】障害のある方への支援の実践例や課題について、質問や意見が出されました。本企画を通じて、日本の野外教育の限界が示され、その解決に向け、主催者側の理解と多様な利用者への配慮の重要性や、インクルーシブな教育的野外教育プログラムの開発とその実施に向けた取り組みの必要性が確認されました。



ヨセミテからつながる多様性理解の広がり

企画者：小林 幸一郎（特定非営利活動法人モンキーマジック）

コーディネーター：林 綾子（びわこ成蹊スポーツ大学）

登壇者：小林 幸一郎（特定非営利活動法人モンキーマジック） 伊藤 相（東京外国語大学）

本企画では小林幸一郎氏（企画者）と、林綾子氏（コーディネーター）を中心に、クライミングを通じた多様性理解の促進について出席者とともに議論が深められました。シンポジウムは、フリークライミングが米国のヨセミテ国立公園から人工壁の登場を経て、オリンピック・パラリンピック種目となるまでに至った歴史的変遷の説明から始まり、その上で、クライミングの本質的な価値は、誰かと競うことではなく、「それぞれの人が自分のやり方で、限界を押し上げ成長を実感できる」点にあることが改めて強調されました。この価値に着目し、2005年に設立したモンキーマジックは、2012年より多様な人々へクライミングの機会を提供する、「交流型クライミング」の活動を全国に広げています。これは、障害のある人となない人が共にクライミングを楽しむことで、社会における多様性理解を促進できるという理念に基づくものです。モンキーマジックの小林氏からは、活動の広がりや、視覚障害者クライミングで

重要となるガイド方法など、長年の実践に基づく現場の知見が共有されました。また出席者には目を閉じて音声情報を聞いてのクライミング課題を登るイメージングにも向き合ってもらい実体験を共有しながら深掘りをしてもらいました。登壇者の東京外国語大学の伊藤相氏からは、交流型クライミングが参加者の「居場所感」、「生きづらさの軽減」、「障害の理解」にどのように貢献しているかという調査結果や、クライミングの特性と多様性理解の関係について、参加者へのアンケートおよび自身の経験をもとに報告いただきました。その後のディスカッションでは、野外教育の現場に立つ参加者から、それぞれが現場で向き合う多様性理解促進の課題について様々な側面から活発な質疑が行われました。本シンポジウムは、クライミングという身体活動を通して、野外教育が共生社会の実現に向けてどのような役割を果たせるか、新たな視点と共通理解を得る貴重な機会となりました。

◆ 若手優秀発表賞

選考委員長：山田 亮（北海道教育大学岩見沢校）

若手優秀発表賞は、若手研究者の野外教育に関する研究発表を奨励し、本学会はもとより野外教育研究の活性化を図ることを目的として創設され、日本野外教育学会第22回大会より継続しています。天理大学にて開催された第28回大会では、6題の発表エントリーがなされ、選考が行われました。

当該発表賞にエントリーされた若手研究者が一堂に会して、口頭での発表がなされました。発表内容としては、プログラム効果研究、フィールド研究、哲学的研究、社会学的研究、歴史的研究と、野外教育への学問的アプローチとして、多岐にわたるもので、今後の野外教育研究の可能性を広げ、深化していくことが大いに期待できるものだと強く感じました。

選考は、「研究のオリジナリティ」「研究の有用性」「研究方法の妥当性」「発表技術（口頭発表の適切さ・資料の内容・質疑応答など）」の4項目で評価されました。

選考の結果、伊藤相氏（東京外国語大学）の発表が、選考委員から特に高い評価を受けて受賞されました。伊藤氏の発表はいずれの審査項目においても高い評価を受け、今後の発展性も含めた期待が寄せられました。次回大会においても、若手研究者によるエントリーをお待ちしております。

選考委員長：山田 亮

選考委員：渡邊 仁、瀧 直也、中丸 信吾

受賞者 **伊藤 相 氏（東京外国語大学）**

発表演題 **スウェーデンの野外教育におけるロマン主義
—Friluftsliv とナショナル・アイデンティティ
形成に関する史的研究—**

<受賞コメント>

この度、このような賞をいただいたこと、大変光栄に思っております。また、学部生時代から私の研究を見守り、ご指導をいただいた先生方に、心より感謝申し上げます。思えば、初めて野外教育学会に参加した学部生の頃から、学会の先生方には気さくに、真摯に、そして熱く、様々なお話をさせていただき、常に励まされてきました。このような温かいコミュニティのなかで研究を進められることを幸せに思います。

私の研究は、フリルフスリフ（Friluftsliv）というスカンディナヴィア独自の野外生活文化について、歴史的な

観点から探求するものです。北欧の野外環境教育については、森のようちえんや森のムッレ教室をはじめとして日本においても興味深い実践や調査研究が行われていますが、こうした取り組みの思想的・文化的背景の一つとも言えるフリルフスリフの研究は、現代の野外環境教育に新たな視座を提供できるのではないかと考えています。それは、フリルフスリフ自体が何か特別に新しい考え方を含む文化だからではなく、フリルフスリフに対する共感が一体どこから生まれているのかを問うことが、私たち自身が埋め込まれた文化や価値観について再考するきっかけになるからです。

このテーマへの関心は、学部生時代のスウェーデン留学経験を端緒としています。卒業論文、修士論文を通じてフリルフスリフへの思想的・歴史的理解を深める過程で、さらなる探求への意欲が駆り立てられると同時に、人間と自然との関係性の複雑さや奥深さを痛感してきました。そして現在、フリルフスリフの史的研究は、私の博士論文の中心テーマとなっています。文化や価値観を相対化することの難しさを感じながらも、野外生活文化あるいは身体文化としてのフリルフスリフを手がかりとして、自然との相互作用が人間形成においてどのような意味をもつか、という、より大きな問いに少しでも迫ることができたらと思っています。

その過程となる今回の発表内容をこのように評価していただいたことは、今後の研究の励みとなります。より質の高い探究を続け、社会に貢献できるよう努力を重ねていく所存です。また、今回の大会で多くの先生方や同世代の研究者と議論できたことは、私の視野を広げる貴重な機会となりました。改めて、皆さまに感謝申し上げます。ありがとうございました。



授賞式 平野会長より授与

◆ 参加者の感想

野外教育学会への 2 日間通しての参加、発表者としての学会参加、そして奈良・天理にうかがうこと、初めてづくしの 2 日間でした。野外教育を様々な切り口から問い直し、時には参加者のみなさまと意見を交わしながら一緒に考え、大変充実した時間を過ごしました。運営にあられたみなさま、参加者のみなさま、温かく、活気溢れる学びの場を創っていただき、ありがとうございました。私は「青少年教育施設で行われる体験活動の熱中症予防」をテーマに発表を行い、特に学校教員や施設職員の方と意見交換をする中で、日頃取り組んでいる調査研究と実践現場との繋がりを肌で感じました。より実践に資する研究を行い、実践現場を支えていきたいと気持ちを新たに

この度は、第 28 回大会に参加させていただき、誠にありがとうございました。私は今回、民間企業という立場で初めて参加いたしました。弊社は採算性の課題を抱えながら、公募での野外教育事業を続けている現状があります。その中で、行政による教育格差是正政策を論点に挙げたポスター発表では、野外教育の参加者層の偏りについて深く対話することができ、大変実りある時間となりました。企業として事業を運営する中で、参加費と参加者数の関係は、野外活動に対する世間一般の価値を厳しく突きつけてきます。複数回の下見や人員配置を考慮した適正価格では参加者が集まりにくく、参加費を極端に下げ

私は今回、初めて野外教育学会に参加させていただきました。学部生の時から少しずつ野外教育に関わり始めましたが、まだまだ未熟者です。そんな私にとって、今回のテーマである「ツーリズムから考える自然体験の価値」は基調講演や研究発表を通して、新たな学びにどう活かすかという具体的な実践例と、それを支える理論の両側面から、視野を広げることができました。ポスター発表や研究発表では、これから研究に取り組んでいくにあたって、新たな気づきも多く、大変勉強になるものばかりでし

阿部 麻由里（国立青少年教育振興機構）

しました。また、2 日間を通し「ツーリズムから考える自然体験の価値」というテーマの下、今必要とされる「知の深化、探索、育む教育」を行うために野外教育が果たせる役割とは何か、地域資源を活かしながら人々が主体的に学び、交流し、地域の価値を再発見する場を創出することが求められており、いかにそれが大切なことなのか、改めて考える機会となりました。日本の青少年教育を牽引する立場として何ができるか、何をしていくべきなのか。変化の激しい社会の中で、求められる答えも刻々と変化しますが、この問いへの答えを考え続け、自身の取り組みの先の存在をも見据えながら、引き続き励んでまいります。

福畑 皓生（合同会社PAIS）

た際に初めてより多くの層に手が届くという現実があります。しかし、本学会では、多くの研究者が多角的な視点から野外活動の価値を証明すべく研究を進めています。大会を通して、この活動がその金額に値する価値を持つことを改めて確信できました。今後は、これら研究によって証明されている「価値」を、どのように「お金を払う価値」として幅広い層に伝え、訴求していくかが、私達のような実務者にとっての大きな課題となります。アカデミアと実務の連携を深めながら、野外活動の価値の一般化に貢献できるよう、尽力してまいります。

佐々木 陽奈（日本女子体育大学大学院）

た。なかでも大きな収穫だったのは、アプローチは異なれど、各地の大学院生や研究者と関わったことです。研究者の方の他にも、外部で実践されている方や同じ大学院生の発表など、自分にとって刺激になり、得るものが多かったと感じます。また、これから研究や活動を進めていく上で、自分の引き出しが増えたと感じます。今回学んだことや感じたことを、これからの研究や活動に活かしていけるよう努めたいと思います。貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。

若手コラム：本村 明夏 さん

第 101 号ニュースレターから始まった学会員の若手によるリレーコラム、第 2 回の執筆者は、国立日高青少年自然の家の本村明夏さんです。

若手コラムでは、若手会員の皆さんが日頃抱いている思いや実践・研究に対する考え、さらには学会に対する期待や提案などを、自由に、そして率直に発信していただければと思っています。今後の連載にも、どうぞご期待ください。



本村 明夏（国立日高青少年自然の家）

千葉県市原市出身。信州大学大学院教育学研究科修了。修士（教育学）。国立日高青少年自然の家事業推進係主任。自然の家のキャッチフレーズ「はじめてのたき火と川あそび」をたくさん子どもたちに届けるべく、業務に励んでいます！

2019 年の学会ニュースレター「平成生まれの学会員大集合」に寄稿させていただいてから 6 年が経ちました。当時の私は、野外教育を学んだ者としての理想と、機構職員としての現実の間で、野外教育との関わり方を模索していました。あの頃は「どう関わるか」を考えていましたが、「どう広げるか」を考えるようになりました。

北海道はまさにアウトドア天国です。そんな地で野外教育に携わることに私は誇りを持っていますが、「教育」という言葉が時に距離を生むこともあると感じました。

私は「北海道アウトドアフォーラム」という、アウトドアに関係する方々（教育関係者、ガイド、観光事業者、行政担当者、アウトドアメーカーなど）が一堂に会し、情報交換や交流を通して、立場を越えたつながりや新しい価値を生み出すことを目的にした事業を担当していました。

参加者の多くは「人と自然」「人と人」をつなぐ仕事をしており、自然の中で生まれる人の気づきや変化を支える過程を大切にしていました。その姿に野外教育と通じる思いを持っていると感じました。

しかし、話の中で「教育」という言葉を口にすると、少し空気が変わる瞬間がありました。「教育」に対して、難しそう・堅苦しそうという印象を抱く人が少なくありませんでしたが、フォーラムを重ねるうちに、少しずつ変化も感じるようになりました。自然の家での取り組みや、子どもが自然の中で学ぶ様子を紹介すると、「活動を支えている場があるのは心強い」「自分たちの活動ともつながりそう」と共感してくれる参加者が増え、子ども向けの体験活動を企画する動きも生まれました。

立場や肩書きは違っても、自然の中で人が何かを感じ取り、自ら学びを生み出していく、その過程を大切にしている点は共通しています。だからこそ、「教育」という言葉の重みを守りながらも、その本質をもっと多様な人たちと共有できる形で伝えていくことが、今の私にできる挑戦だと思っています。



北海道アウトドアフォーラム

海外研修報告

Kia Ora from Aotearoa New Zealand : ニュージーランドからこんにちは

岡田 成弘（東海大学）

はじめに

前号に引き続き、NZ での野外教育（OE）事情について報告したいと思います。今、NZ の野外教育関係者の間で「#BringOutdoorEdBackIn」というハッシュタグが広がっています。何のことだか、わかりますか。

NZ の教育改革と OE の位置付け

NZ では 2023 年に政権交代が起こり、現 NZ 政府（教育省）が大胆な教育改革を進めています。従来の柔軟で探究的な学びから、基準と成果を重視する学びへと転換しようとしています。体験や探究から知識・スキル習得へ、個別最適化から全国一律評価へという方向性です。NZ では政治への関心が高く、投票率は 70～80%とされ、2～3 期ごとに政権交代が起こります。しかし、教育制度において短期間にこれほど大きな転換をすることは稀であり、国内でも賛否が分かれています。

これまでは、NZ の教育カリキュラムでは 8 つの学習領域の一つである Health and Physical Education (HPE) の中に、Outdoor Education (OE) が独立した主要領域として位置付けられていました。OE は体育科目の一部ではなく、並列の関係でした。高校では OE は選択可能な一般科目として存在し、大学入試資格に活用できる単位も認められています。そのため、OE の専門性をもった教員がいる高校もあり、OE は学術的にも重要視されてきました。

しかし、新制度の高校科目リスト案では OE が一般科目から外されており、職業教育科目に分類される可能性が示されています。これにより、OE が大学入試資格に使用できなくなることや職業訓練的になることが懸念されています。

反対運動とその広がり

この改革案に対して、NZ の野外教育関係者は強く反対しています。EONZ (Education Outdoors New Zealand) という学校教育における野外教育を推進・支援する全国組織が中心となり「#BringOutdoorEdBackIn」(OE を一般科目に戻そう) という運動を展開しています。署名活動や議会への請願、教育省や議員への嘆願メール、SNS での情報

拡散などが行われています。署名は人口の約 1%にあたる 5 万 3 千人を超え、2025 年 10 月 21 日に国会に提出されました。

NZ の野外教育関係者の主張を見ると、NZ ではアウトドア活動は国のアイデンティティの一部であり、ウェルビーイングや幸福に寄与すると強く信じられていることがわかります。また OE は、土地とのつながりを促進し、te ao Māori (先住民族マオリの世界観) を理解する機会としても重要視されています。OE は多様な背景を持つ生徒に成功体験を提供するとされ、教室内で評価されにくい生徒にもやりがいや楽しさを与えられる（不登校改善にも影響する）と考えられています。また、OE の学びは観光や環境分野に限らず幅広い職業に役立ち、NZ の産業を支えていると語られています。OE には費用負担や評価基準の難しさ、教員の負担などの課題も指摘されていますが、それ以上の価値があると主張されています。

現地で感じる熱量

私は EONZ の facebook で毎日のように更新される情報を追っていますが（是非[ご覧ください](#)）、その熱量には驚かされます。NZ の野外教育関係者が情熱と誇りを持ち、OE の必要性を政府に訴える姿勢はとても印象的です。お国柄や文化が違とはいえ、今の日本では想像しにくいほどのムーブメントです。日本の野外教育学会や個人として、何ができるかを考えるきっかけになりました。残りの半年、日本の野外教育のあり方を考えながら、NZ の #BringOutdoorEdBackIn の動向を注視していきたいと思っています。



署名サイトのトップ画面

第 8 回 日本野外教育学会 研究集会 開催のご案内

企画委員長 野口 和行（慶應義塾大学）
実行委員長 吉松 梓（明治大学）
実行委員 高橋 達己（筑波大学） 中丸 信吾（日本女子体育大学）
張本 文昭（沖縄県立芸術大学） 福富 優（至学館大学）
棟田 雅也（鹿屋体育大学）

日本野外教育学会では、学会員の研究力の向上、学会員同士の研究に関わる情報交換の活性化を目的として 2018 年度より「研究集会」を継続して開催してきました。今年度は 12 月に東京にて開催いたします。オンライン配信も行いますので、遠隔参加も可能です。多くの会員の皆さまのご参加をお待ちしております。

【日程】 2025 年 12 月 7 日（日）10:00-16:00

【方法】 対面参加、オンライン参加（zoom）、アーカイブ視聴

【場所】 明治大学 駿河台キャンパス リバティータワー7階 1073 教室
東京都千代田区神田駿河台 1-1（御茶ノ水駅より徒歩 3 分／神保町駅より徒歩 5 分）

【プログラム】

10:00-12:00 午前の部

タイトル： 対照群を用いない実践研究の提案

～「デザイン研究」と「体育・スポーツにおける実践研究の進め方」からのアプローチ～

講師： 梶 ちか子 先生（鹿屋体育大学）

従来の教育実践研究で求められた対照群を設定した仮説検証型研究は、教育や体育・スポーツの現場では困難である場合も多くあります。そこで、近年注目されている「デザイン研究」のアプローチと「体育・スポーツにおける実践研究の進め方」の考え方をともに、実践の形成的評価を通じて知識を構築し、授業者や指導者の暗黙知・経験知を可視化した上で、反復的な検証を行い、実践知の妥当性や信頼性を確保することを目指す方法論を提案します。

12:00-13:30 昼休み

13:30-15:30 午後の部

タイトル： 野外教育活動の実践を評価・分析するための混合研究法の考え方とその方法

講師： 抱井 尚子 先生（青山学院大学）

野外教育活動の効果検証はこれまで量的研究が中心でしたが、質的研究も盛んに行われるようになってきています。さらに、近年では量的・質的分析だけでなく両者を統合した解釈として混合研究法が注目されています。研究集会では野外教育活動の実践を評価・分析するための混合研究法の考え方とその方法について紹介します。

【参加費】（参加形態にかかわらず一律の金額）

会 員：一般会員 3,000 円、学生会員 1,000 円、団体・賛助・名誉会員 3,000 円

非会員：一般 4,000 円、学生 1,000 円

【申込方法・参加費納入方法】

1) 下記 Peatix サイトよりお申込み・参加費をお支払い頂きます。（11 月 23 日締切）

<https://peatix.com/event/4609148/view>

2) 上記 お申込みが確認できた方へ事前案内や zoom のアクセス情報等を連絡します。

【問い合わせ先】

吉松 梓（明治大学） yoshimatsu@meiji.ac.jp *問い合わせはメールでお願いします。

書籍紹介

〈驚き（ワンダー）〉を呼び込む自然体験学習—環境を学ぶ心身をつくる第一歩

編 者：関 礼子／井上 真理子／太田 和彦

発売日：2025 年 6 月 20 日

定 価：2,500 円（税別）

発 行：昭和堂

目 次

【Ⅰ部 なぜ自然体験が必要なのか】

1 章 環境教育のファーストステップ

2 章 センス・オブ・ワンダー

3 章 アジアの智慧・仏教に学ぶサステナビリティ

4 章 『アウトドア・スタディーズ』が拓く視点

【Ⅱ部 どのような自然体験を試みるのか】

5 章 自然体験学習から何を学ぶのか

6 章 野外教育実践から何を学ぶのか

7 章 バーチャル・リアリティと自然体験

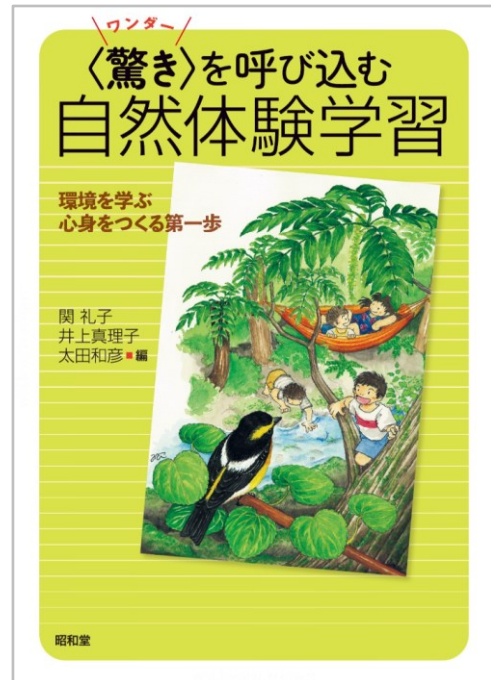
【Ⅲ部 自然体験はどう展開されてきたか】

8 章 学校教育における環境教育の推進と展開

9 章 青少年の成長を支える自然体験

10 章 本物にふれる学び

他、多数のコラム



本書は、2023 年 5 月に開催された日本学術会議公開シンポジウム「学術と連携した環境教育の質的確保に向けて（主催：日本学術会議環境学委員会環境思想・環境教育分科会）」での報告・議論をもとに、環境教育における自然体験の意義や理論、現場での実践や課題を、〈驚き＝ワンダー〉というキーワードのもとに再構築し、自然体験を通して学び続けることの意味を、学際的かつ実践的に論じているものです。それぞれの章を執筆した著者の専門分野は、環境教育、野外教育だけではなく、環境倫理学、環境哲学、環境社会学、国際開発学、森林科学、社会教育など多岐にわたり、それぞれの分野を牽引する研究者が執筆にあたっています。さらに、それぞれの分野に関わる実践者も数多く参画しています。

本書が自然体験を捉えるうえで大切にしているという 7 つのコンセプトがあります。その 7 つは「自然体験を通じた感性、非認知能力の育成」、「環境教育と持続可能性の向上への総合的な視点」、「学校教育と主体的・対話的な学び」、「地域に根ざした体験活動と社会との連携」、「専門知と実践的なスキルをつなぐ」、「自然とテクノロジーの拡張による生態系の理解」、「課題：体験格差の基盤弱体化と

改善の方向性」であり、これらは、野外教育がこれまで研究成果として貢献してきた、いわば得意分野もありながら、なかなか手がつけられていない内容や今後の発展には欠かせない視点が散りばめられていると強く感じました。

編者の関氏のあとがきには、次のように述べられています。『自然体験は、プログラム化され、サービスとして提供され、コンテンツとして消費されたら終わり、という素朴な体験至上主義に終止するわけにはいかない。その先にある学びを見据えることが必要となる。〈驚き〉の先にある学びとは何か。その学びは与えられるものか、体験を通して湧き出てくるものか。想定通りにはならない体験をどう捉えるか。その学びのうちに、さらなる〈驚き〉を呼び込んでいく自然体験はどのようなものか。こうして問いが次々と発見されていく。』

体験からの「学び」について、本書では多くの視点から、その重要性について述べられています。野外教育の立場として、今一度、自身の日頃の実践の中から、問い直していきたいと思います。

文責：山田 亮（北海道教育大学岩見沢校）



日本野外教育学会